



2007年11月5日

日本応用心理学会ニュースレター

—コミュニケーションの広場—

No. 18

2007年度大会（第74回大会）を終えて

大会委員長 蓮花 一己

日本応用心理学会第74回大会は、2007年9月8日、9日の両日、奈良県の帝塚山大学にて開催いたしました。その前日7日には、理事会を奈良ホテルにて開催しました。2日間の大会期間中、大きなトラブルもなく学会を進行することができましたことは関係者の努力のみならず、発表者等の大会参加者一人ひとりの真摯な姿勢のお蔭であると感謝しております。誠にありがとうございました。

今回の大会には、事前予約参加者が179名、当日参加者が92名の計271名の参加者がありました。とりわけ、院生の参加者が68名となり、若手研究者支援の取り組みが功を奏して増加傾向にあることは喜ばしいことです。昨年と異なる点はシンポジウムを大会企画シンポジウムのみとし、会員からは自主ワークショップを提案していただいたことです。これには6件の申し込みがありました。さらに、口頭発表を復活して、発表を口頭とポスター発表のいずれかを選べるようにしました。口頭発表に39件、ポスター発表に66件の発表申し込みがあり、ほぼご希望の形式でご発表いただけたと考えております。

今回、とくにテーマを設定しておりませんでした



が、近年の犯罪や災害、事故等のリスクへの社会不安の高まりを背景に、大会企画シンポジウムとして「災害リスクの認識と対応：心理学がとらえる過去、現在、そして未来」をテーマにしたシンポジウムを実施しました。これは、災害リスクがどのように認識され、どのような対策がとられてきたかを振り返った上、そこからの教訓を生かし、今後の総合的な防災力の発展を求めて活発な論議がなされました。

また、特別講演として、フィンランド・トゥルク

目次

1. 2007年度大会（第74回大会）を終えて （蓮花一己・大会委員長）……………	1	4. 各委員会からのお知らせ	
2. 研究発表した大学院生の声		①機関誌編集委員会（藤田主一委員長）……………	6
①加藤純子（帝塚山大学院・修士課程）……………	3	②心理学会諸学会連合（垣本由紀子常任理事）…	7
②島崎 敢（早大大学院・博士課程）……………	3	③認定「応用心理士」認定審査委員会 （浮谷秀一委員長）……………	9
3. 会員の活動報告		5. 75回大会、76回大会開催のご案内……………	10
①書評(1)～所正文会員による単著出版紹介……………	4	6. 名誉会員の推戴……………	10
②書評(2)～芳賀繁会員による翻訳書出版紹介……………	5	7. 編集後記……………	10



大学のケスキネン教授が「運転行動の階層モデルとヨーロッパの運転者教育の新たな展開」と題して、講演を行いました。ケスキネン教授は事故分析に基づいた交通安全対策の研究や、運転者教育の分野で、ヨーロッパで著名な交通心理学者であります。教授の階層モデルに基づいた運転者教育のあり方や最近のヨーロッパの動向について解説がなされました。

自主ワークショップには「日本応用心理学会の過去・現在・未来」といった大きなテーマから、大学院生による具体的な研究分野のテーマに至るまで多様な内容が並びました。こうした自主的な企画は学会活性化のためには重要であり、企画を通じて若手から中堅の研究者の学問的ネットワークの構築に結びつけることができれば良いと思います。

学会研修会は今年が第6回であり、名誉会員の神作博先生から、「社会における応用心理士の使命と課題・留意点」、理事の井上孝代先生から「コンフリクト転換のカウンセリング」のテーマで学習しました。

懇親会はバスで移動して、奈良公園にあり由緒のある奈良ホテルで開催しました。出席者は準備委員等を含めて120名程度で盛会であったと喜んでおります。今年は海外の国際会議にならって、本学会としてはおそらく初めての試みでしょうが、同伴者の参加をしていただくように呼びかけたところ何名かの同伴者にご参加いただきました。また、新たに



名誉会員になられた馬場房子先生と垣本由紀子先生からのご挨拶をいただきました。本学の三木善彦教授の手品のアトラクションに続いて、中締めの前に、次期大会委員長の藤森立男教授(横浜国立大学)から次回大会のご挨拶、特別講演のケスキネン教授からのご挨拶がありました。限られた時間でしたが、会員間の交流に少しは寄与したと喜んでおります。

以上、大会のご報告の終わりにあたり、今大会の開催において、学内関係者はもとより多くの学外の関係者にも多大なご支援やご協力を得ることができました。皆様方にこの稿をお借りして心より御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

(帝塚山大学心理福祉学部教授、副学長)

研究発表した大学院生の声

加藤純子 (帝塚山大学大学院・修士課程)

応用心理学会が終了して1週間ほどになる。学会期間の熱気と興奮から冷め、学会の発表を無事終えた安堵の気持ちや、学会準備と一緒に頑張ってきた仲間と目指した目標に到達した達成感とともに、目標としてきた学会が終わったことでの一抹の寂しさも感じる今日この頃である。振り返ると、学会への発表(口頭発表とワークショップ企画)を思い立ってからの半年以上に及ぶ準備期間と発表当日、実に充実した貴重な機会を得たと感じる。

口頭発表は修士論文の途中経過にあたる部分の発表であったが、統計分析において仮説に沿った結果を導くことができず苦心した。しかしそのおかげで、自分の仮説を違う方向から検証し先行文献を新たに検索するなど、より広い方向から結果を考察することができた。自分の仮説はあくまで仮説であり、結果をどう理解していくかを考える際にはより多彩な知識と柔軟な思考が必要であることを身をもって経験できた。また、一つの考えを確信するとなかなか譲らない頑固な部分を持ち合わせている私自身を改めて認めざるを得ず、自分自身の振り返り機会ともなった。この振り返りには頑固な自分に素直に向き合えないという葛藤がつきまとったが、周囲の助けを得てようやく自分の考えを棚上げし他の可能性を考えるという方向に向かうことができた。この経験は、今後さまざまな面で生きてくると信じている。

他方ワークショップ企画は、将来の活動を視野に入れ産業界でのストレスマネジメント教育を取り上げ、EAPや生理学・体験学習からのアプローチを試み、各方面で専門的知識を持つメンバーとともに、ワークショップの内容等作り上げてきた。お互いが違う専門的立場にいることから、時には激論を交わしたり自分にはない新しい視点に刺激を受けたりしつつ、互いを高め内容を膨らませることができた。今回の企画から、多分野で連携を取ることを考える場合必要なのは、何を目指すかという全体での「方向性」と、連携を取る相手について「よく知ること」であると痛感した。よく知り合うことから理解が生まれる、そんな感覚を味わうことのできた機会でもあった。

発表当日は初めての場に緊張したが、フロアの先生方から質問を頂いたり、懇親会で発表について感

想等を聞かせて頂く中で、自分が発信したことに対して多方面から反応をもらえる喜びも体験した。今まで幾つかの学会に参加してきたが、今回初めて発表する側となったことで学び見えてきたものもある。学会の大会運営についても言えることである。円滑な進行が発表者にとって大きな安心となることを、今回恥ずかしながら初めて知った。また、若手研究者支援制度も発表者として随分助けられた。この制度が、『発表したい』との思いを『発表する』という行動に移す最後の一押しとなったのは事実であるし、この制度のおかげで遠方からワークショップに参加する仲間を迎えることができた。制度を有難く思うとともに、今後もこの制度を有効に活用して、多くの若手研究者の方々が発表の機会をもたれ、さらなる交流が図れることを望む。

島崎 敢 (早大大学院・博士課程)

私は交通のセッションでリスク知覚に関する口頭発表を行いました。発表会場にはケスキネン先生がいらっしゃっていたので、パワーポイントに英語を併記してこなかったことを悔やんだのですが、垣本先生がケスキネン先生の横で私の発表を通訳してくださり、内容を理解していただくことができました。また、質疑応答では蓮花先生や芳賀先生にも貴重なご指摘をいただき、大変勉強になりました。ケスキネン先生をはじめ、著名な先生方に発表を聞いていただいた上に、コメントをいただくことができ、応用心理学会での初めての発表にもかかわらず、大変贅沢で貴重な経験ができたと感じています。

また、前泊したこともあり、奈良市内を色々と散策する機会を得たことも楽しい思い出となりました。国宝や世界遺産になるような奈良時代の文化財はもちろんすばらしいのですが、今回の発見は、奈良の魅力が奈良時代の文化財だけではないことでした。例えば奈良町にある江戸時代の町屋造りの建物は今でも民家や店舗として現役で使われており、なんとも味のある町並を作っていますし、懇親会会場となった奈良ホテルの重厚な和洋折衷の普請は大正浪漫オタクの私にとっては鳥肌ものでした。

懇親会でも少しですがケスキネン先生とお話することができました。自分の英語力のなさには辟易しましたが、本当に良い勉強になったと思います。



ほかにもたくさんの人と交流をもつことがで、有意義な懇親会でした。また、会場や料理のすばらしさはさることながら、特別に用意していただいた何種類もの美味しい地酒や柿の葉寿司、三木先生のショータイムなど、きめ細やかであたたかいおもてなしをしていただきました。準備の大変さを思うと、蓮花先生をはじめ、大会準備に携わった皆さまに頭が下がる思いです。応用心理学会の懇親会は夫婦参加を歓迎してくださるようなので、来年はぜひ夫婦で参加したいと思います。

大会の最後に行われたケスキネン先生の特別講演では、運転行動を、車両の操作といった低次な視点から人生の目的、果ては社会や文化といった極めて高次な視点まで、さまざまな階層から説明していただき、大変参考になりました。研究というもののもつ本質的な問題として、個々の研究は非常に狭い範囲を虫眼鏡で見るような常態に陥りがちですから、大会の締めくくりに、このようなグローバルな視点の講演を拝聴することができ、プログラムとしてもすばらしかったと思います。

会員の活動報告

前号に引き続き、今年前半に会員が出版した著書の書評をお届けいたします。今回は2冊ご紹介いたします。評者はいずれも松浦常夫広報委員です。広報委員会では、書評のみならず会員のさまざまな活動報告をお知らせしたいと考えております。情報のご提供をよろしくお願いいたします。

れに対して著者は、「交通を切り口とした本ではあるが、実は高齢者福祉と深く結びついている」と述べているように、いずれは運転を断念する高齢ドライバーに対する社会のあり方についてユニークな提言をしている。

70歳以上の運転者は、運転免許更新に先立ち最寄りの自動車教習所で高齢者講習を受講することが定められているが、講習で悪い成績を示しても、更

「高齢ドライバー・激増時代 —交通社会から日本を 変えていこう」

所 正文 (著)、学文社 (2007)

高齢ドライバーの問題は、社会の高齢化に伴う高齢ドライバーの増加によって交通心理学でも関心を集めるテーマとなっている。しかし、そこで主として扱うのは、高齢ドライバーの心身機能のどの部分の低下が事故増加に影響するか、それがどういった種類の事故増加に結びつくのか、またそれを踏まえて高齢ドライバーにはどういった安全運転教育・訓練が必要かといった交通安全上のテーマが多い。こ



新の意志があれば原則的に免許の取り消しに至ることはない。しかし、2009年からは75歳以上の高齢運転者に対して免許更新時に認知機能検査が実施されることになり、これで問題ありとされた運転者は運転免許取り消しの候補となる。著者はこのことにより運転免許を返上する高齢ドライバーが増えることを予想し、そうしたドライバーに対して「(車という)便利なものを捨て去る勇気をもつことが真の未来志向であることを、認知症を罹患したドライバーにはぜひともご理解いただきたい」と励ましている。また、社会に対しては彼らに対する生活支援を確保すること、そのためには「認知症ドライバーに対するケア担当チームに医師、家族、交通警察の担当者らとともに交通心理士(書評者注:日本交通心理学会認定の資格)が加わる」ことを提言している。

認知症をはじめとする運転を断念した高齢者に対して、社会の側は新しい社会観をもつ必要があると著者が主張している点は一考に価する。その社会観とは、イギリス流の give way (譲る精神)であり、「健康を失った高齢者でも幸福と感ずることができる社会観であり、相手との関係を重視し、お互いに気遣う関係があれば満足感が得られ、幸福感につながるという社会観 (productive aging)」である。「その人の周りにお互いに気遣い合う人がおり、運転を止めた後の生活において支障が少なければ、運転断念ということは、そんなに難しい決断ではないように思える」と著者は述べ、生活継続の条件整備の例として北海道の伊達市の取り組みを挙げ、「地方都市の一角に運転をしなくても生活できるエリアを設置し、そのエリアに高齢者用の都市型集合住宅をつくること」を提案している。こういった提案は、従来の交通心理学を含めた応用心理学の研究者からは聞かれることが少ない。交通安全や高齢者問題に携わる多くの人々に読んでいただきたい著書である。

「交通事故はなぜなくなるか リスク行動の心理学」

ワイルド, G. J. S. (著)、
芳賀 繁 (訳)、新曜社 (2007)

ワイルドによれば、代表的な交通安全対策(3Eと呼ばれる教育、工学、規制)は、安全への動機づけに影響しないことが多いために、ドライバーらに行



動適応を起こさせてしまい、時間あたりの事故率を減少させない。また、走行距離あたりの事故率は減少するが、多くの場合ドライバーらは移動に要する時間を変えないので、結局のところ年間の1人あたりの事故率は変化しないという。この議論は、研究者のみならず交通安全対策に関わる多くの人の反発を買って、ワイルドの旗色は芳しくない。しかし、本書の後半に述べられているように、交通安全のためには「人々の安全への動機づけに影響するような対策、特に無事故という成果を評価し報酬を与えるものがもっとも有望である」と提言し、更に安全性向上のために従来の3E主義が変わって、期待主義(将来に期待できる社会の創設)を唱えている点は、評者も同感である。

前半に述べたワイルドの考えは、彼の有名なリスク・ホメオスタシス理論に由来する。その理論とは、「人は自分がおかしているリスクを常に感知している。そして、そのリスク量を、自分が受け入れる用意があるリスク量と比較し、両者の差をゼロにしようと努力する。したがって、感知されるリスクの水準が受容可能なリスクよりも低い場合は、リスクが増えるような行為をしようと、感知されるリスクが受容できる水準より高い場合は、もっと慎重に行動しようとする」という危険補償的な行動適応の理論である。この理論のもう1つの特徴は、個人レベルの適応行動というよりも人々全体(国民)を考慮している点で、「ある国のある時期における事故および生活習慣病による損失は、国民全体が受容するリスク水準(これは人々の個人的な危険体験とともに、前の時期の事故率や罹患率に影響される)によって決定される。これを軽減したいならば、その国の人々が受容するリスク水準を引き下げる努力

をしなければならない」という。

ワイルドは本書を通じて、リスク・ホメオスタシス理論を支持する多くのデータを呈示しているが、それ以上ある反証データを呈示していない点が残念である。リスク・ホメオスタシス理論は、個人レベルでもワイルドが言うほどは定式化されないと考えられている。例えば、運転の途中から道路環境が良くなるとほぼ全員のドライバーがスピードを上げるであろうが、受容可能なリスクいっぱいまでは上げ

ないであろう。また、集団レベルでは人々のリスク水準が前年の事故率により影響を受けるというが、人々が前年の事故率をはっきりと認識しているとはとても考えられない。しかし、ワイルドのリスク・ホメオスタシス理論を擁護する説明は、かなりの説得力をもって読者に迫る。断定した言い方をしなければ、正論だと思われる有益な議論が多く、読んで損はしない好著といえよう。

各委員会からのお知らせ

機関誌編集委員会

委員長 藤田 圭一

(1) 機関誌論文への投稿に関して

- ①機関誌「応用心理学研究」は、現在、年間2号(秋期号、春期号)を発行しています。機関誌は会員の皆様の投稿によって成り立っています。投稿論文は常時受け付けていますので、下記の「編集事務局」宛にふるって投稿してください。なお、現在の編集体制では、おおよそ4月末までに投稿された場合は「秋期号」、10月末までに投稿された場合は「春期号」に向けて審査(査読)が行われます。審査に時間がかかり、次号に先送りされることがありますので、投稿される場合はゆとりをもって早めをお願いします。機関誌「応用心理学研究」には邦文のほか英文投稿も可能です。投稿・執筆方法については邦文の規程に準じます。英文投稿、英文アブストラクトは、事前にネイティブチェックを受けておいてください。
- ②機関誌「応用心理学研究」への投稿・執筆規程、編集規程が新しくなりました。詳細は第32巻第2号に掲載しましたので、以後の投稿につきましては、新規規程を参照してください。また今後、学会ホームページにも同様に掲載します。なお、本学会では、現在のところ電子投稿を受け付けておりません。
- ③新編集規程(第32巻第2号に掲載)にも記述されていますが、従来の論文形態(原著論文、資料論文、総説論文など)のほかに、「短報論文」と「実践報告」を新設しました。「短報論文」は、機関誌の見開き2ページを1論文とする形式です。「短報論文」のコンセプト、投稿・執筆方法については、別添の内容を参照してください。

④「実践報告」は、本学会会員が応用心理学の現場で取り組んでいる活動等を、論文の形式で投稿するものです。現場からの活動成果、メッセージ、新たな視点などを切り口に論述してください。執筆方法は、新投稿・執筆規程に準じますが、必ずしも科学的研究論文の形式にこだわりません。会員の皆様が日々取り組んでいる活動等を、応用心理学の立場からまとめてください。なお、実践報告も審査(査読)の対象になりますので、会員の皆様からの多数の投稿をお待ちしています。

(2) 短報論文の新設について

日本応用心理学会機関誌「応用心理学研究」に「短報論文」の形式を新設しました。

短報論文の新設目的は、新しい研究内容を簡潔にまとめ投稿しやすくすること、迅速審査で機関誌に掲載できるようにすることです。以下に、短報論文のコンセプト、投稿・執筆の方法等を略記しますので、精読の上、ふるって投稿してください。

- ①短報論文として投稿できる方は、投稿者全員が本学会正会員に限りませんが、本学会の正会員であれば誰でも投稿できます。
- ②短報論文への投稿は、応用心理学に関する未公開の論文であることが必要です。これには、新規の執筆論文のほかに、修士論文、学会発表、研究会発表などの研究をまとめた論文などが該当します。短報論文は、科学的論文の要件を満たしてください。
- ③1論文の長さは、図表・文献を含め、「応用心理学研究」の印刷済で見開き2ページとします。1論文を2ページ(B4判)で紹介します。1ページ目の上段左側に邦文による論文名、著者名、所属機関を記述します。邦文の下に英文で同様に記述します。さらに、その下には英文アブストラクト

(100語以内)とキーワード3語(英文)を記述します。ここまでの文字数を26字×27行の範囲内に収めてください。以下、本文は目的、方法、結果、考察、文献の欄に分けて執筆します。図表は適宜、挿入してください。見開き2ページを有効に利用するため、本文全体の文字数を、投稿時には、1ページ目左側が26字×20行、右側が26字×47行、2ページ目左側が26字×49行、右側が26字×48行の範囲内で執筆してください。文字数の合計は、26字×164行です。添付の投稿イメージを参照すると理解しやすくなります。なお、投稿・採択された論文が、投稿時のレイアウトのまま印刷されるわけではありませんから、この点、了承してください。

- ④論文(含: 図表、文献)が2ページの範囲内に収まるかを確認してください。特に図表が小さすぎないように気をつけてください。科学的論文の要件を満たすこと、英文アブストラクト(必ずネイティブチェックを受けてください)を付加することが条件です。印刷済で2ページを超過する論文は受稿できません。
- ⑤短報論文は、原著論文・資料論文などと同様に、査読者による審査があります。したがって、学会誌のレフリー論文になります。審査は、学術論文としての研究水準はもちろんですが、それ以上に、研究観点の面白さ、論旨の明解さ、簡潔な内容、研究の発展性などを中心に審査されます。修正を求められたり、残念ながら不採択の場合もありますので、あらかじめ了承してください。また、短報論文として掲載された論文に新たなデータの追加・再処理・論考を加えて、原著論文・資料論文として再投稿することができます。
- ⑥短報論文への投稿は、上記の文字数の範囲で執筆した原稿を3部提出してください。ただし、そのうちの2部は著者名、所属機関を伏せたものにしてください。また同時に、見開き2ページにレイアウトした原稿を1部同封してください。なお、本学会では電子投稿を受け付けておりません。
- ⑦短報論文は迅速審査をモットーにします。したがって、その号の「応用心理学研究」が発行可能なギリギリの時期まで、審査結果を待つことができます。
- ⑧「応用心理学研究」第33巻第2号(2008年春期号)へ向けての論文審査を希望する会員の方は、2007年12月末までに投稿してください。また同

様に、2008年秋期号へは2008年6月末までに投稿してください。お待ちしております。

なお、投稿先は以下のとおりです。

〒158-8508 東京都世田谷区深沢7-1-1

日本体育大学教職教育II研究室内
日本応用心理学会「機関誌編集」事務局 藤田圭一 宛
TEL & FAX: 03-5706-0924
E-mail: sfujita@nittai.ac.jp

日本心理学諸学会連合

常任理事 垣本 由紀子

かねてから懸案でありました心理学検定(1級、2級)が、以下の要領で、2008年に第1回検定が行われることになりましたのでお知らせいたします。これは、約40の心理学会からなる「日本心理学諸学会連合」の認定です。

なお、日本心理学諸学会連合のホームページ(<http://jupa.jp/index.php>)にも詳述してありますので、併せてご参照ください。

【心理学検定の実施概要】

①実施日時: 2008年9月14日(日)

②実施会場: 全国5会場(札幌、東京、名古屋、大阪、福岡)

③受験領域:

A 領域: (原理・研究法・歴史)、(学習・認知・知覚)、(発達・教育)、(社会・感情・性格)、(臨床・傷害)

B 領域: (神経・生理)、(統計・測定・評価)、(産業・組織)、(健康・福祉)、(犯罪・非行)

検定1級: A 領域から5領域およびB 領域から1領域以上を合格

検定2級: A 領域から2領域およびB 領域から1領域以上を合格

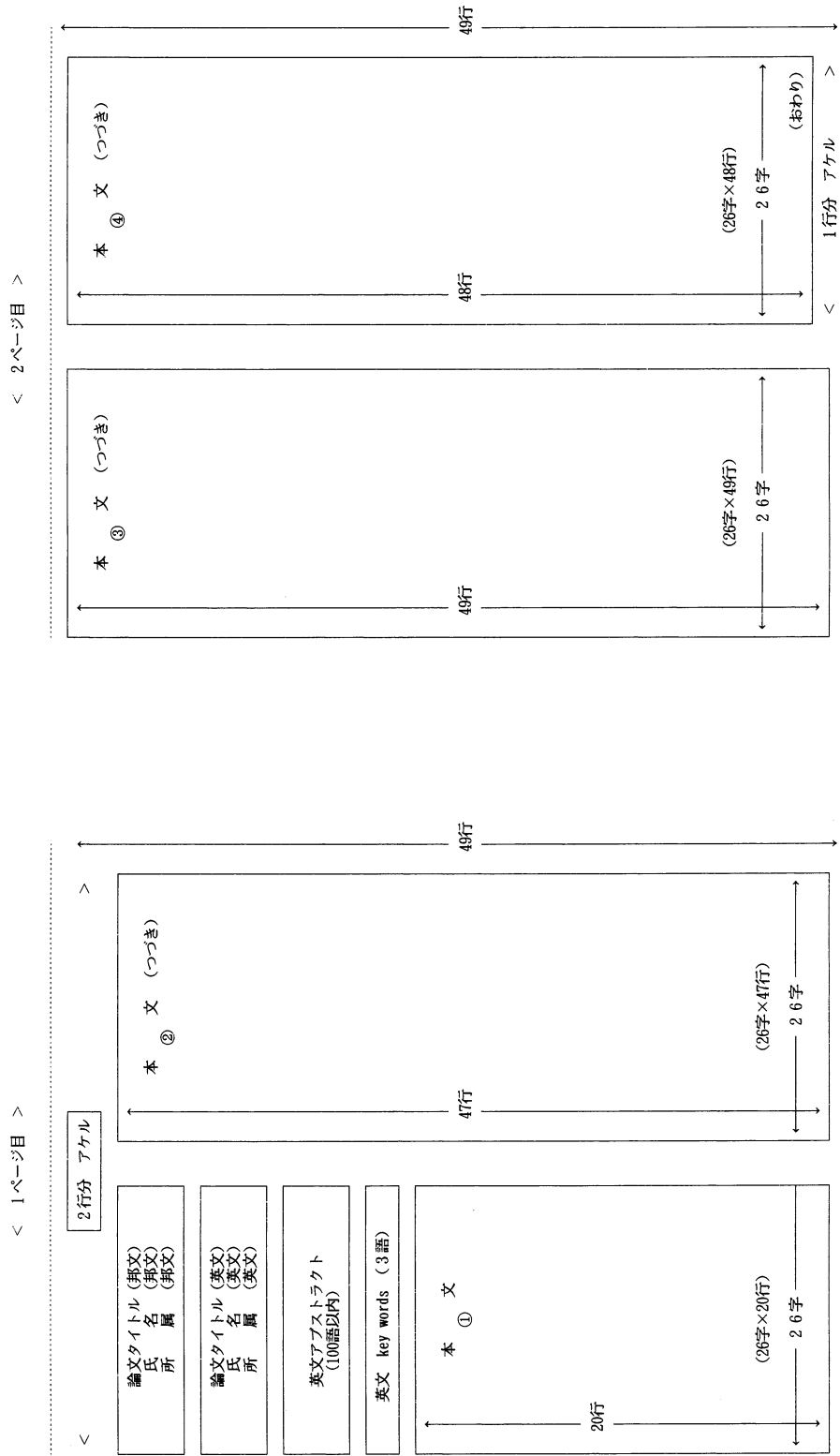
なお、「認定心理士」の方は、A 領域から3領域合格で検定1級と認定

【心理学検定規定(抜粋)】

名称: 本検定は、日本心理学諸学会連合認定心理学検定(1級、2級)と称する。

目的: 本検定は、大学・学部卒業レベルの心理学の知識・能力の客観的到達度を測定する試験である。この目的で希望するすべての者は受験資格がある。用途としては、個人が心理学の知識・能力

『応用心理学研究』の「短報論文」投稿イメージ



の到達度を知ること以外に、心理学の基礎資格として、大学院の入学試験、心理学関連の諸資格の認定、あるいは公的機関や企業等での専門知識の証明として利用されることなどを目指している。

運営：本検定は、日本心理学会諸学会連合・資格委員会に属する心理学検定局において運営する。

組織：心理学検定局は、次の2部会で構成する。

(1) 運営部会：運営、実施等を担当する。

(2) 試験部会：出題、合否判定等を担当する。

実施場所・回数：複数の会場で、当面、年1回実施する。

出題方式：多肢選択方式

出題領域(10領域)：前述のとおり。

受験料・認定登録料：別に定める。

(本規定は、平成19年6月10日から施行される。)

【今後のスケジュール】

08年1月：第1回検定試験問題作成開始

募集要領、受験ガイド配布開始

08年6~7月：受験受け付け開始

08年8月：受け付け締め切り

08年9月：第1回心理学検定試験実施(9月14日(日))

結果の処理

08年10月：初旬、結果発表、合格証発行

【心理学検定試験実施細目(第1回検定試験)】

①心理学検定規定に基づき以下のように実施するが、細部については変更がありうる。

②受験資格は、希望するすべての者にある。

③受験者は、第1回試験では、3領域以上8領域まで受験することができる。

④多肢選択試験により、各領域から20問を出題する(合計200問)。

⑤各領域の出題者は公表しない。

⑥試験時間は、各領域15分とする。受験領域数に応じて総時間は、45分以上2時間までとなり、その時間内に受験領域の問題を行う。

⑦すべての受験者は、いっせいに試験を開始し、受験領域数に応じて試験終了時間が異なる。

⑧合否判定の基準は、約6割の正答を目安とする。

⑨試験問題は非公開とする。

⑩各領域ごとに合否判定をし、その合否のみを受験者に通知する。

⑪「1級」は、A領域5領域、B領域1領域の6領域以上を合格者とする。「2級」は、A領域2領域、B領域1領域をあわせて3領域以上の合格者で、1級の基準に達しない者とする。

⑫「認定心理士」の取得者は、A領域3領域合格すれば、1級が授与される。

⑬領域ごとの合格実績は、当分の間有効とする(有効期限を決めない)。

⑭受験料は、基本受験料3,000円、1領域の受験料1,000円とする。

(例)4領域受験の場合は、7,000円となる。

⑮合格者は、認定登録料を払い、合格証書が授与される。

⑯認定登録料は、1級7,000円、2級5,000円とする。ただし、2級の取得者が1級になる場合、合格領域数が増え新しく合格証を作成する場合には、2,000円とする。

⑰本資格は、更新の必要がないものとする。

⑱第1回心理検定試験は、2008年9月14日(日)、(14~16時)

全国5会場(札幌、東京、名古屋、大阪、福岡)で行う。

⑲事業の運営は、心理学検定局と(株)実務教育出版で行う。

認定「応用心理士」認定審査委員会

委員長 浮谷 秀一

平成19年度前期分の資格申請はありませんでした。

なお、19年度後期分の資格申請の受付期間は、11月末日までですが、締め切りを平成20年1月まで延長しています。資格要件を有していて、まだ資格申請をされていない会員の方は、ぜひこの機会をお願いします。資格申請書類を希望する方は、ハガキかメールにてご請求ください。また、資格申請手続きに関するお問い合わせも受け付けています。

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場3-8-1

東京富士大学応用心理学研究室内

日本応用心理学会認定「応用心理士」事務局

E-mail: ukiya@fuji.email.ne.jp

75 回大会、76 回大会開催のご案内

2007年9月8日に開催された総会において、次のように決定いたしました。

- (1) 第75回大会
 - 開催校：横浜国立大学（大会委員長 藤森立男）
 - 開催日程：2007年9月14日（日）～15日（月）
- (2) 第76回大会の大会委員長 川本利恵子（九州大学）

名誉会員の推戴

2007年9月8日に開催された総会において、次の2名の方が名誉会員として推戴されました。

垣本由紀子氏、馬場房子氏（五十音順）

訃報

本学名誉会員の亀井一綱先生が2007年3月31日に逝去されました。生前の本学会へのご貢献を感謝するとともに、謹んでお悔やみ申し上げます。

編集後記

今年の夏は記録的な猛暑が続きました。そうした中で奈良・帝塚山大学で本年度の大会が行われました。蓮花委員長をはじめとした大会運営にご尽力された関係者の皆さま方には心より御礼申し上げます。すばらしい大会でした。大会に参加された会員方々は古都奈良の情緒を十分に堪能しながら、充実した2日間を過ごすことができたのではないかと思います。なお、本誌に掲載した写真は、大会本部からご提供いただきましたもののほかに島崎敢会員（早大大学院・博士課程）が撮影したものが一部含まれていることを付記いたします。

応心会員の高齢化が進んでいるといわれる中で、今年は若手会員の大会参加と研究発表が増えまし

た。学会の将来発展へ向けて希望が見えてきたかと思えます。

学会活動の生命線は機関誌の充実であると言えます。今号でお知らせいたしましたように機関誌編集委員会（藤田圭一委員長）では、学会活性化のためにいろいろと知恵を絞っております。藤田先生は今秋の応心と日心大会にて応心学会活性化のためのワークショップを企画されております。こうした盛り上がり方が会員間に広がることを期待したいです。

すでに日本列島は秋の装いで覆われております。こうした快適な気候の元で会員の皆さま方がお元気にますます活躍されることをお祈りいたします。次号の本誌は来年春の発行を予定しております。

（所 正文）

発行 広報委員会
委員長 所 正文
日本応用心理学会事務局
〒169-0075 東京都新宿区高田馬場4-4-19
(株)国際文献印刷社内
電話 03-5389-6491 FAX 03-3368-2822